□磯野直秀：**日本博物誌年表** 2002. 944 pp. ¥25,000. 平凡社.

本書は日本の博物誌年表で，関連する海外事項が下段に附記されている．「西暦紀元前一万年，土器の制作が始まり，縄文時代にはいる」から「1868年明治1年12月の時点で東京に残っていた旧幕府御薬園やその附地所」の名称（11ヶ所）までに至る．この部分は目次と凡例に続き，実質732ページに達し，本書の主体である．年表の「付記」として明治初期の江戸博物誌に深く関わる伊藤圭介「日本産物志前編」などの資料8点についての解説が付けられている．付録として薬品会年表がつき，引用・参考文献目録は67ページにわたる．さらに索引（人名，書名，事項），用語集などが後付として100ページついている．索引は人名索引，書名索引，事項索引が用意されている．文献と索引が充実していて，使いやすくかつ分かりやすく作られているため，本書の利用価値は非常に高くなっている．

本書「はじめに」によれば，「執筆に当たっては「白井年表」（白井光太郎 1934．改訂増補日本博物学年表）「上野年表」（上野益三 1989．年表日本博物学史）を土台としたが，資料には可能なかぎり当たり直し，近年得られた数々の新資料や知見を取り入れた」とある．事実，国内事項では多くの新しい記述が加えられ，本書の何よりの特色となっている．しかし，年表編集の基本方針は上野年表（1989）と異なっており，上野年表が「博物学者の研究対象である動植物の変遷，（略）移入などは（略）厳密には博物学史年表の内容になすべきことではない．博物学年表と題して区別すべきことである」との方針で作られているが，磯野年表では両者は一体となっている．また，海外事項は上野年表よりも簡略されている．

著者は幕末までの日本に博物学はなくそれを博物誌と呼んで区別している．著者の博物誌研究の根本には日本人の歴史的自然観への興味があった．本書著述を通して，西欧の博物学と日本の博物誌は一見似てはいるが本質は全く異なるという見方に立つ．東の世界の見方は「動植物をつねに人の目を通して眺め，人間にとっての使い道や美しさを問う」ものであり，それは「人間の目を意識的に切り捨てて自然を記述する西の世界の手法」に基づく見方と違うという．自然物について日本人の根本にある学問観を探り出して興味深い．今日特に強まっている有用無用の学問評価基準の中にもこの見方が生きているような気がする．

歴史年表を見ていつも気になる点がある．登場人物の生没年は一般に西暦で示されていることが多く，本書でも人名索引でそうなっている．しかし，西暦と和暦との間にはずれのあることが普通であるため，月日まで調べないと年でずれる場合がある．一般には年までのずれは少ないので間違いが頻出することはない．例えば伊藤篤太郎の生没年は1865–1941とされている．これは上野年表（1989）でも同じである．伊藤篤太郎は和暦の慶応元年11月29日生まれであるが，慶応元年は全部が1865年ではなく，同日は西暦では1866年ではなかろうか．没年は昭和16年でもちろん西暦であり，1941年と一致する．西暦で表記する場合には1866–1941とするのが正しいように思う．次に細かい点を一つ．万葉集の植物では誰でも萩を話題にするが，本書785年では萩が松と共に自然環境破壊を象徴するという説が紹介されている．その原典を調べずに書くが，奇妙に思える．本書に紹介されていない事項であるが，鴨長明「無明抄」（1210, 1211以後，または1212年に刊行とされる）に「為仲みやぎののはぎほりて上る事」に宮城野から京に萩を運んだ話がある．1981年に本誌 **56**: 240において「無明抄」を1080年頃と誤記したので，この機会に私の間違いを訂正しお詫びしたい．

著者は江戸時代以前の日本の自然誌記録を基礎から掘り起こし，新たな磯野年表を生み出した．しかし，磯野年表（2002）は白井年表（1934）と上野年表（1989）に取って代わるものではない．併用してこそ全部がより一層の価値をもつと思う．年代で比較しても，上野年表の19世紀後半幕末から明治33年（1900）までの充実した部分は磯野年表に含まれていない．また，上野年表では国外の研究が多く紹介されており，日本の自然誌研究に及ぼした影響が強く関連づけられている．ここに両著者の博物学あるいは博物誌に対する学問観の違いが現れているようにみえる．

上野氏は「純粋自然科学の博物学」への変遷をみたが，磯野氏は日本博物誌の歴史は今日の日本の生物学につながっていないとみる．私は東北大学での講義中に「上野益三：日本博物学史」（1989講談社学術文庫）を推薦書の一つとして学生に紹介していたが，江戸期の博物趣味と研究は私には今日の日本の生物学の基礎となったと思えるためである．磯野年表（2002）の「付記」には江戸博物誌と日本の生物学とをつなぐと思われる具体的な資料が挙げられている．しかし，このような歴史は見方の違いに関わらず，本書は科学史の基礎知識なしにも利用できる得難い年表であり，実験分野の生物学研究者にも薦めたい．日本の生物学の基本図書といえる良書である．

（大橋広好）